

高村光太郎の詩と彫刻と書の中の老荘思想

The Philosophy of Lao-Chung in
Takamura Kotaro's Poetry and Sculpture and Calligraphy

上原 一明*

UEHARA Kazuaki

摘要

本論文では、高村光太郎の詩と彫刻と書の作品中において、老荘思想からどのような影響を受けていたかを実際の彼の作品を挙げながら検証する。まず彼の幼少期である明治時代の教育について述べ、欧米留学経験による客観的視点の構築、彼の詩の中の老荘思想、そして、彼の彫刻と書の中の老荘思想について述べる。

Abstract

I verify what kind of influence underwent from the Philosophy of Lao-Chung in Takamura Kotaro's poetry and whole work of sculpture and Calligraphy by this paper while mentioning his actual work. Education in the Meiji Period which is his childhood first is described, and building of the objective angle by the European and American studying abroad experience, the Philosophy of Lao-Chung in his poetry and the Philosophy of Lao-Chung in his sculpture and Calligraphy are described.

はじめに

高村光太郎は、明治から大正、昭和にかけて活躍した彫刻家であり、詩人としても日本文学史に残る詩作品を数多く残している。また書道家としても著名であり、詩の内容に伴う書作品として晩年独自の書体を以て数多くの書を揮毫している。本論文は、その書の内容の中に老荘思想がどのような影響を及ぼしているのかを検証する。またその書体からみえてくる老荘思想の世界観

をどのように視覚化しているのかを論ずる。

1、明治期の学制と高村光太郎初期の書

まず始めに、高村光太郎の生きた時代、どのような教育がなされていたのかを検証する。これにより当時の教育、とりわけ彼がどのような教育環境であったのかが、後の文学的展開に大きく影響するからである。

明治維新後の教育における当時

* 山口大学教育学部教授。

の日本新政府は、江戸時代より継続してきた寺小屋や漢学塾（注1）を改め、小学校を設立した。明治元年8月、京都においては率先して小学校が創設され、翌年12月までに64校の小学校が開校した。（注2）さらに明治3年には中学校も開設され、一年次に書経・公法・明律などを、二年次には左伝・聯法史略などを、3年次には論語・地球説略などを学ばせた。（注3）更に明治5年の「學制」によりはじめて全国画一の中等教育制度が設けられた。（注4）その教科内容は、国語、数学、習字（諸読・作文）、図画、外国語、地学、史学、幾何、窮理学、化学、生理学、政体大意となり、江戸時代で採用されていた儒教を中心とした漢学の科目がなくなっている。特に外国語は英語、フランス語、ドイツ語を教授されており、明治政府がヨーロッパ列国に目を向けていたと分かる。しかしながら、明治10年に東京開成学校と東京医学校が合併し設立された東京大学の予科の試験科目として、和漢学、英語、算術が課せられていることから、漢学は学んでいる。入学後は英語、数学、地理学、史学、物理学、化学、生理学、植物学、動物学、図学、和漢学の科目が課せられている。

明治17年の「中学校通則」では、当時急激に西洋文物の輸入による国民が西洋熱に浮かされ、よもすれば国粹を破壊する傾向を有していたため、「忠孝彝倫」を重視し和漢学が見直された。（注5）東京大学予備学校の教科の中にも和漢分を重視する

傾向が見受けられる。（注6）このような時代背景の中、高村光太郎は明治16年に生まれた。彼が対象となる明治19年公布された小学校令の尋常小学校の学科には修身・読書・作文・習字・算術・体操、土地の状況により図画・唱歌・裁縫（女兒）の一科もしくは数科を加え、高等小学校においては、修身・読書・作文・習字・算術・地理・歴史・理科・図画・唱歌・体操を学習している。（注7）ここで学習した習字は、彼の書の基本となっていることは言うまでもない。

明治20年には日本在来の思想に関係する神・儒・佛三道の哲理を講授し、併せて西洋哲学を兼修する哲学館（現私立東洋大学）が創設された。西洋化が進む中、当時から儒教を筆頭とする中国思想の学術研究も重要視されていた。（注8）

このように、明治期に入り西洋の科学思想を受け入れながらも、江戸時代から継承されてきた中国哲学の教育や研究は継続されていた。特に、儒教に代表される『四書』（『大学』・『中庸』・『論語』・『孟子』）や老荘思想に代表される『老子』・『莊子』などは、日本人にとって大変馴染み深い。当然高村光太郎もこのような中国哲学を学び、「書」を通してその造形と意味の繋がりを独自の感性で吸収していたと考えられる。

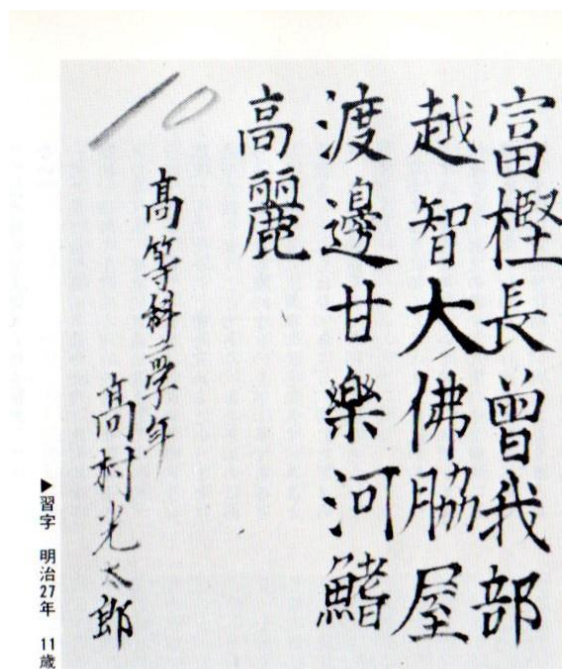


図1 特集 高村光太郎『墨8号』 p. 30

2、高村光太郎の欧米留学経験の影響と客観的視点

高村光太郎は、父・高村光雲の期待に応えることなく家業は継がず、自由な創作と詩や論評、翻訳などの文学方面に力を注いだ。1906年2月から1909年6月までの3年4か月間のアメリカ、イギリス、フランスへの留学経験により、欧米の合理的な考え方を知り、芸術の本質の追求への道を選択したからである。その欧米への留学経験から、思想的なことにおいても西洋的な視点に影響されている。これは以下の『父との関係』の内容で理解できる。

アメリカで私の得たものは、結局日本的倫理観の開放といふことであつたらう。祖父と父と母とに囲まれ

た旧江戸的倫理の延長の空気の中で育つた私は、アメリカで毎日人間行動の基本的相違に驚かされた。あのつつましい謙遜の徳とか、金銭に対する潔癖感とかいふものがまるで問題にならないほど無視されてゐる若若い人間の気概にまづ気づいた。

(注9)

この欧米留学経験は、後の彼の生き方に大きな影響を与えた。それは欧米の先進的な芸術世界を知った帰国後、父親である当時の権威・高村光雲に代表される日本芸術界の旧制度に対する反発と、新しい真の芸術表現を追求したいという強い意志に対する周囲との考えの差異によるジレンマと苦悩になっていく。そして彫刻制作と実生活との理想と現実は、更に彼を文学の世界への新たな無限の可能性へと誘う。

帰国後5年経った1914年、31歳の時に出版した『道程』の中にフランスのルーブル美術館に所蔵されている「モナ・リザ」を題材とした「失はれたるモナ・リザ」が載っている。やはり欧米留学中に見聞した歴史や文芸作品、美術作品を題材にしたものが見受けられる。しかしこれは「モナ・リザ」本来の持つ意味とは異なる日本人としての高村光太郎の客観的視点で表現されている。「根付の国」にみられるような否定的な日本観もまた、欧米留学経験ならではの彼独自の客観視といえよう。このように欧米留学の経験による物事を客観視する態度が備わった一例として、筆者先の論文『高村光太郎の書とその造

形表現』の中でも指摘している「書の意味は書の邪魔になるのであって、意味を解さない外国人の方に分があることになる。(高村光太郎 『書の深淵』 昭和 28 年)」を挙げ、

「彫刻」から文学的要素を排除することで、純粋な彫刻的造形美を創り出すことと、「書」から意味的要素を排除することで、純粋な書的造形美を創り出すこととの類似性である。(注 10)

とする論理が生まれる。高村光太郎の欧米留学経験の影響と彼の作品を客観視する態度は、

その後の彫刻と書の造形的純粋性の確立へと構築されていく。

3、高村光太郎の詩の中の老荘思想

高村光太郎は俳句や短歌、論評や翻訳、書簡及び日記等の膨大な執筆を残している。特に詩は近代日本を代表する詩人としての知名度は高い。彼の詩は非凡なる知識と人生経験、そして独自の感性によってその時代を映し出している。欧米留学による西洋哲学の知識も伴い、これまでの日本人にはない広い視野と洞察力で詩を創作している。このような詩の中に中国思想、とりわけ老荘思想を扱った詩作品が数篇確認できる。

昭和 12 年 (1937 年) 作で、河出書

房「現代詩集」で発表された「猛獣篇」(注 11) の中に「老聃、道を行く」という詩がある。老子の「道德經」をモチーフに詩っている。

象のように耳の大きい老先生は 水牛の上にもまるくうづくまり 時の歩みよりもひそかに

太虚の深さよりも物しづかに 晴れ渡つた秋の日ざしにとつぷり埋れて

どこまでもつづく陝の道を西へ行く (中略)

其の無に当つて器の用有るを悟る者が 満天下に充溢する叡智の世は来ないか

為して争はぬ事の出来る世は来ないか ああそれは遠い未来の文化の世だらう (以下省略)

まさに老子五千文字の「道德經」を扱った、高村光太郎の生き方を象徴する和光同塵を老子の姿や動向をイメージしてつくられた詩である。晩年、老体にもかかわらず戦後たったひとりで七年にも及ぶ岩手県花巻市の山奥での隠遁生活を実践した、高村光太郎の生き様を予見したともいえる詩である。具体的には「無用の用」を用い、老荘思想の基本的概念のひとつを取りあげ、彼自身の思想的スタンスを明確にしている。

更に興味深いことに、昭和 14 年 (1939 年) に発表された「北溟の魚」

は当時の時代を反映している。『莊子』の逍遙遊の冒頭に記されている「北溟有魚 其名為鯤 …」をベースにしている。

北溟の大魚鯤は今化して北海のボオトとなる。ひどく小さくなったのもだが 圖南の志はかはらない。
 (中略) 機雷原の間を巧みに泳ぎ、息を殺して目ざす獲物にぐつと近寄り 一發必中の魚雷を放つ。(中略) 鯤が化して鵬となり 羊角して九萬里を上り雲氣を絶し、そもそも何が故に南溟へ徙つたか。水中のボオト何が故に南を圖るか。何が故と問ふ事をやめよ。こは人間の知るところではない。答の奥に又答えのある 現實無限のすさまじい物理作用だ。(注12)

これは明らかに太平洋戦争が間近に迫った大日本帝国海軍潜水艦の事を詠っている。『莊子』の逍遙遊の現実離れした壮大な世界観を、今や敵艦を沈めんとする潜水艦の威力に例え、南進する旧日本海軍を鼓舞する詩である。詩中の「何が故と問ふ事をやめよ。こは人間の知るところではない。」というくだりは、南進する旧日本海軍を盲目に支持する姿勢を表している。敗戦後、高村光太郎が戦争に対する自責の念を持っていたということは、この詩からもうかがえる。当時の世相としては仕方がない状況であったのであろう。

4、高村光太郎の書の中の老荘思想

終戦後、高村光太郎は岩手県花巻市の山奥において独居自炊の生活をしたが、その7年の間に数百点にもおよぶ書作品を残したといわれている。本来は彫刻家としての造形活動を望んでいたであろうが、彫刻を制作する設備の無い山奥の小さな山小屋では到底不可能である。また年齢も62歳から68歳という高齢期であり、病にも悩まされ、体力的な問題もあった。そこで、その彫刻造形を書造形に転化したのである。鑿や彫刻刀を毛筆に変え、粘土や木という彫刻素材を紙上の墨字に変えたのである。湧き出てくる創造美を、自らが表現したい造形美を追求するために。彼にとって詩という精神を、書という肉体で表現したのである。

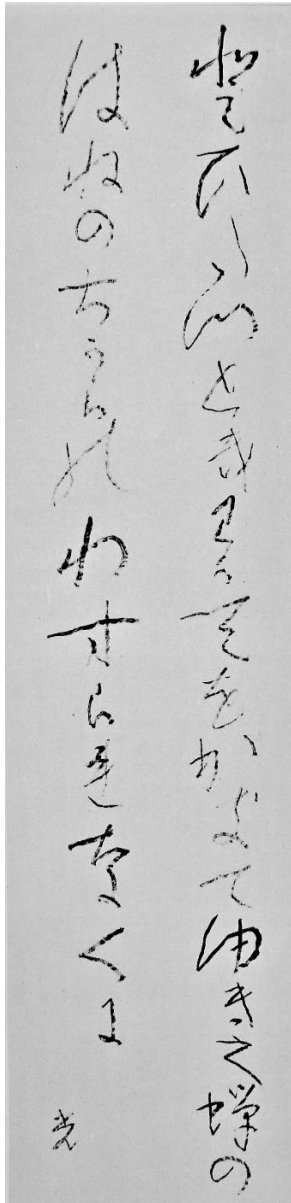


図 2

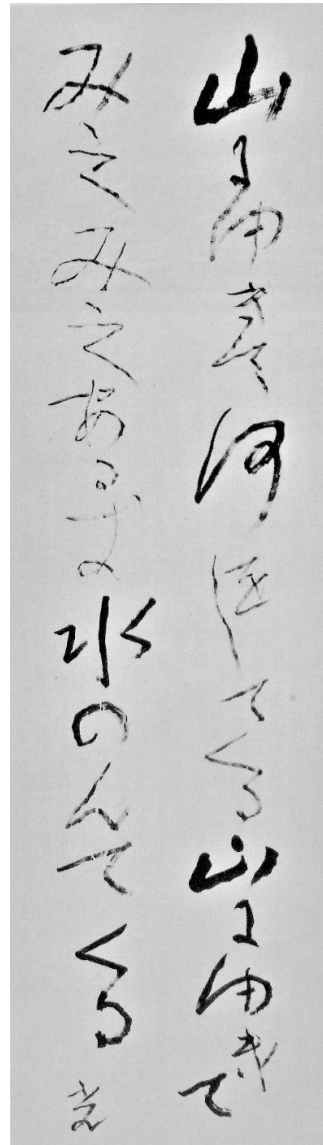


図 3

図2は、昭和24年66歳時の作品で、「とびたつときわがてをかきてゆきし蟬のはねのちからのわすれなくに」という書である。(注13) 承知のとおり、蟬は7年間もの間地中で成長し、羽化してわずか一週間で死んでゆくという命の儂さを象徴している。しかしその一週間で精一杯大きく鳴き、蟬として自らの生命力の高さをアピールし交尾をして死んでゆく。その蟬を手にとり、その飛び立つ時の羽の力強さを感じつつ、

生きる強さと儂さを表した詩である。高村光太郎にとって蟬との関係性は比較的高く、以前蟬の木彫(図4)も制作しており、命について象徴的に扱われている。この頃の木彫作品は、父・光雲の写実とは異なり、写実的でありながらも鑿跡を効果的に残し、薄く彩色する手法で制作されており、高村光太郎独自の作品といえる。



図4 蟬(大正13年)『高村光太郎 造形』p.82

『莊子』の逍遙遊の中にも小なるものの象徴として、蟬が登場する。

蝸与鸞鳩笑之曰、我決起而飛檜楡枋、時則不至而控於地而已矣。奚以之九万里而南為。

セミやコバトは、鵬を笑う。「ニレやマユミの梢にとびつくのさえ大変なこと。とびつけずに、地面にたたきつけられることだってある。南へ九万里も飛ぼうとする奴の気が知れない」(注15)

という飛距離の関係を自らの尺度でしか物事を見られないが、決して優劣があるわけでもなく、それもまた道理であるということを説いている。その置かれた状況でそれぞれ見解が異なるのである。高村光太郎は当時この詩の中に、66年間の己の人生とこの一瞬で羽ばたく命僅かな蟬の羽の力強さを対比し、この一瞬の出来事を永遠に忘れないようにすることが生きる価値を高めるのだ、ということを感じたに違いない。

図3は、昭和25年67歳時の作品で、「山にゆきて何をしてくる山にゆきてみしみしあるき水のんでくる」という書である。(注14) 高村光太郎にとって山とは生きていく上で恵みをもたらす作為の無い自然そのものであり、老荘思想における「無為自然」に当てはまる。その山に行き、みしみしと音を立てながら歩き、生命維持にとってとても大切な水を飲むという、

作為の無い行動を詠んでいる。『老子』第八章に「上善若水、水善利萬物而不争。…」という水の状態を善しとし、人の行動や態度に当てはめると良しする内容がある。ここで高村光太郎は、「無為自然」の山に入り、生命維持に必要な水を求める行動を挙げながら、生きとし生ける全ての命に必要とされる「水」の存在を強調している。

いずれの書の書体も、文字そのものを心と体、そしてその時感じ得た心境や情景を白く細長い紙面に表している。文字そのものを心情に合わせて単純化または造形化している。そこには自然に囲まれた山中に包まれた「無為自然」の世界が表現されている。晩年の高村光太郎の書の視覚的要素には、老荘思想の「無為自然」の世界観が表れている。

5. 結論

高村光太郎の生き様を俯瞰してみると、老荘思想の影響が見て取れる。素直に父の家業を継げばおそらく仕事にも生活にも困らなかったであろう。東京美術学校の教授職に就くことも難しくはなかったであろう。しかし彼が学んできた知識や見聞をもとに、彼自身が自然の本能を目覚めさせ、彼自身の生きかたを水のような自然体に変えていったのである。自らの彫刻から文学的要素を排除し彫刻の純粹性を高めるという考え方や、日常の何気ない事からその本質を詩で謳いあげたり、更には日本の軍国主義への傾

倒し流された後、敗戦後岩手県の山中で隠遁生活を送ったのも彼にとっての自然な生き方であった。彼の生き様は正に「無為自然」である。

再び図3の「山にゆきて何をしてくる山にゆきて みしみしあるき水のんでくる」の中の「上善若水」について言及するが、果たして彼自身が日本の彫刻界、文学界、また包括的な芸術界や社会にとって「水」のように必要とされる存在であったのか？という自問自答のような心境であったに違いない。ヨーロッパ留学後、必死になって彫刻界や文学界へ新たな価値観を提示し続けたが、あまり受け入れてもらえず、更にこれまでの彫刻作品やキャリアと価値観を全てを失った東京大空襲と終戦後の隠遁生活。その1946年64歳のころ、「物そのものの美に執着する無機の世界観の形成」（注16）があったのも「無為自然」的な考え方からきている。

晩年の山小屋生活において、唯一の彫刻が図4の「野兎の首」であり、囲炉裏の中から出てきた焼成不完全な土の塊であった。後にブロンズにしているが、原形は崩壊したそうである。

それはまるで地面の中から生まれ出てきた兎の頭部であり、全く人為的な作為のない石の塊のようである。この彫刻は正に「無為自然」の彫刻といえよう。

最後に、高村光太郎は自然の美についてこのような詩を書いている。

自然にとっては 穢ないものなんかない。必要なものはみな美しい。

必要でないものは邪魔なものだ。ところが 邪魔なものが自然にはない。

自然にとっては 必要でないものがない。 みな必要だ。

みな必要だからみな美しい 森羅萬象ことごとく美しい。

「美と真実の生活」より

この詩には、自然万物に対する美の認識を通して、「無為自然」の神髄たる「永久不滅」を表現している。

高村光太郎の詩と彫刻と書、特に晩年の作品においては、「老荘思想」を取り入れ、実践していることがよく分かる。



図5 野兎の首『書とその造形』（『墨52号』）p.12

注釈

- 1) 寺小屋は僧侶から、男子は習字を主とし、読書、作文、算術、修身等教授され、女子は裁縫、生花、茶の湯を教えた。漢学塾とは儒家の私塾である。『学制五十年史』p.15
- 2) 同上 p.14
- 3) 同上 p.17
- 4) 同上 p.49
- 5) 同上 p.104
- 6) 同上 p.107
- 7) 同上 p.142
- 8) 同上 p.187
- 9) 『高村光太郎 日本詩人全集9』p.254
- 10) 上原一明 『高村光太郎の書とその造形表現』 p.4
- 11) 白鳳社 「高村光太郎詩集」年表参考。1938年の『中央公論』におい

- て句読点はない。
- 12) 『高村光太郎全集 第二巻』 p. 272
- 13) 特集 高村光太郎 (『墨 8 号』) p. 17
- 14) 特集 高村光太郎 (『墨 8 号』) p. 17
- 15) 『莊子』中国の思想^⑫ p. 29
- 16) 『墨 52 号』北川太一 高村光太郎年譜
(書の歩みから) p.76
-

参考文献

- 文部省 『學制五十年史』 1922 年 (大正 11 年) 中外印刷株式会社
- 高村光太郎 『独居自炊』 1951 年 龍星閣
- 高村光太郎 『高村光太郎詩集』 1954 年
- 高村光太郎 『高村光太郎全集 第二巻』 1957 年 筑摩書房
- 高村光太郎 『高村光太郎 日本詩人全集 9』 1966 年 新潮社
- 監修：松枝茂夫・竹内好、訳：岸陽子 『莊子』中国の思想^⑫ 1966 年 徳間書店
- 草野心平 『わが光太郎』 1969 年 (株)二玄社
- 高村光太郎 『わが人生観 13』 1970 年 大和書房
- 高村光太郎 『高村光太郎 造形』 1973 年 編集・吉本隆明、北川太一 (株)春秋社
- 特集 高村光太郎 (『墨 8 号』) 1977 年 芸術新聞社
- 高村光太郎 『日本の詩 第 5 集 高村光太郎集』 1978 年 集英社
- 中山公男 『高村光太郎の彫刻』 (『高村光太郎彫刻全作品』より) 1979 年 六耀社
- 『新潮日本文学アルバム 8 高村光太郎』 1984 年 新潮社
- 監修：北川太一 『書とその造形』 (『墨 52 号』) 1985 年 芸術新聞社
- 鐘清漢 『儒家思想と教育』 1991 年 成文堂
- 高村光太郎 『高村光太郎 作家の自伝 9』 1994 年 (株)日本図書センター
- 北川太一 『高村光太郎 書の深淵』 1999 年 (株)二玄社
- 『生誕 130 年 彫刻家・高村光太郎展図録』 2013 年
- 上原一明 『高村光太郎と黄土水における彫刻表現と文学性』 2016 年 『Journal of East Asian Identities』 Vol.1
- 上原一明 『高村光太郎の書とその造形表現』 2017 年 『Journal of East Asian Identities』 Vol.3

〈著者略歴〉

上原 一明（うえはら かずあき）

1966年 沖縄県生まれ。台湾・淡江大学非常勤講師を経て、現在、山口大学教育学部教授。彫刻家。博士（文学）。主な彫刻作品、「山水人」（2013年 台湾・阿里山）、「石彫方位盤」（2010年 日本・山口大学、共育の丘）、思想者（2007年 中国・北京市）、「舟月」（2002年 台湾・新北市）、「太古の響き」（1995年 沖縄県公文書館）など多数。